帝塚山大学現代生活学部紀要　第18号　55～64（2022）　原著論文

グスタフ・スティックリーの『ザ・クラフツマン』における日本

A study on the "*The Craftsman*" by GUSTAV STICKLEY and Japan

矢部　仁見*
YABE Hitomi

It has been widely accepted that Gustav Stickley is a representative furniture maker of the Craftsman style which is regarded as the American Arts and Crafts Movement design in design history, and Stickley was published "*The Craftsman*" magazine that was reflecting an ideological American way of life in early 20C. in the American Arts and Crafts Movement. On the other hand, a lot of Japanese things appeared in the magazines. Here the examination shows that the gradually change of the interest in Japan through the analysis of the Japanese contents in the magazine. It may will be understood that the American Arts and Crafts Movement direction has changed into a fragmented aspect towards the end of the movement.

1．はじめに

本稿では、1901年から1916年にかけてアメリカで発行された月刊誌『ザ・クラフツマン』（*The craftsman*、以下、日本語で表示）に掲載された日本に関連するコンテンツの分析を通じて当時のアメリカにおけるアーツ・アンド・クラフツ運動の受容のあり方とその変容の様相の一端を明らかにする。それによって、これまでこの運動の本拠地イギリスからの系譜や、フランク・ロイド・ライト（1867-1959）（以下、ライト）、チャールズ・グリーン（1868-1957）・ヘンリー・グリーン（1870-1954）（以下、グリーン兄弟）等による著名な建築作品に加えて、本稿で取り上げる『ザ・クラフツマン』誌の発行人であるグスタフ・スティックリー（1858-1942）（以下、スティックリー）の家具デザインによって語られることの多かったアメリカにおける20世紀初頭のデザイン・ムーブメントの変遷に別の評価の可能性を加え、その後2度の世界大戦を経て特有の発展を遂げたアメリカのモダン・デザインの初期背景を探ることを研究の目的とする。

スティックリーは19世紀後半のアメリカの一般家庭において主流であったイギリス由来のビクトリアン・スタイルの室内に、アーツ・アンド・クラフツ運動の思想を基底とした新しいくらしを家具や生活用品、住宅のデザインによって示した人物である。中でも一連の家具デザインは「クラフツマン・スタイル」と呼ばれ、アメリカの家具デザイン史の中で短期間ではあるが、1つのエポックとして扱われている。

ここでもう一つ注目すべきものが、スティックリーが発行人を務めた月刊誌『ザ・クラフツマン』[1)]である。この誌はアメリカのアーツ・アンド・クラフツ運動の中で最も影響力があったものとされ[2)]、当時の一般生活者に何が伝えられたかを知る上で貴重な資料といえる。しかしながらこの誌を詳細に調査し、それを基に内容の全体像や変容にまで言及した研究は管見の限り見当たらない。筆者はこれまでに、誌内に現出するアーツ・アンド・クラフツ運動関連のコンテンツをその内容や数とそれらの変化から分析をおこない、その変容のあり方を明らかにした。

＊ 居住空間デザイン学科　准教授

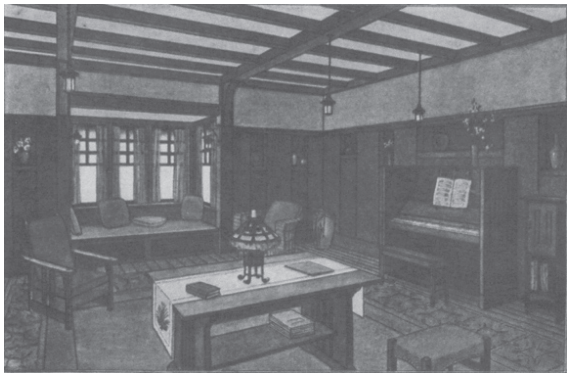


図１　リクライニングチェア(1901)　**図２　アームチェア(1907)（スピンドルシリーズ）**　**図３　インテリアのイラストレーション例**

本稿ではさらに、そこに散見される「日本」に関連する事象に着目し、当時のアメリカのアーツ・アンド・クラフツ運動の動向と日本をめぐる状況を考察する。

２．スティックリーとクラフツマン・スタイル

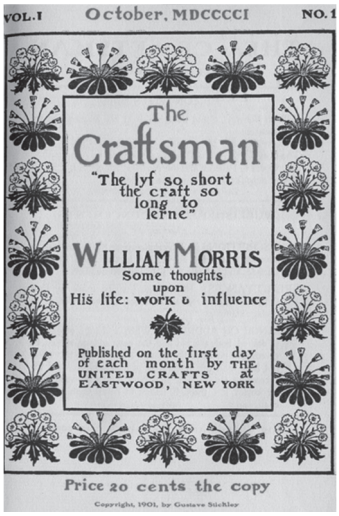
スティックリーは 1858 年にアメリカ・ウィスコンシン州に生まれ、親戚の椅子工場での就業を経て、1883 年より兄弟と家具類の製造会社を始めた。後に販売部門を設け、家具類とは別に住宅建築会社も設立した。スティックリーの会社が現代において代表的なクラフツマン・スタイルとして知られるデザイン群を‘New Furniture’として世に送り出したのは 1900 年にアメリカで開催された家具展示会 The Grand Rapids Furniture Exposition である [3)]。それまでは他の多くの家具会社と同様、ヨーロッパの伝統的なデザインの模倣といった家具を製作していたが、1895 年頃よりヨーロッパへ視察に訪れることによって変わっていく。さまざまな展示会等を見る中で当時ヨーロッパやイギリスで新しい動向であったアーツ・アンド・クラフツ運動の思想やデザインに触れたものと考えられ、次第に単純で明快な素材の扱いによるデザインに変わっていった（図 1、図 2）。

さらにこのクラフツマン・スタイルを特有なものにしているのは、その家具類を使った住宅インテリアの数多くのイラストレーションである（図 3）。それらは『ザ・クラフツマン』誌にさまざまな住宅タイプの提案として掲載され、後に抜粋が数冊の書籍にもなっている。それらを見ると、スティックリーの家具が配置され、その家具デザインと呼応するかのような、壁板や梁で反復する木の水平材・垂直材、低い間仕切りの役割を果たすベンチ、縦格子等が描かれている。見るものに美しさと共に明快なわかりやすさをもってそのくらしのイメージが示されており、それがまさに「クラフツマン・スタイル」に昇華したのだといえよう [4)]。

スティックリーは創業から何回かの社名変更の後それまで「ユナイテッド・クラフツ」としていた社名を 1903 年に「ザ・クラフツマン・ワークショップス」に変更している。この「クラフツマン」という言葉は、ここでは一般的な工人や職人を示すものではないであろう。当時アメリカでは西海岸を中心にカリフォルニア・ミッション・スタイルと呼ばれる単純なつくりの質素な椅子がリバイバイル流行し同様と見なされることもあったことから、社名や月刊誌の名前とされた「クラフツマン」という言葉はそれらとの差異化を図り、イギリス由来のアーツ・アンド・クラフツ運動という確かな思想的出自のもとのスティックリーの会社独自のデザインの象徴として用いられたものであったと考えられる。

３．月刊誌『ザ・クラフツマン』

『ザ・クラフツマン』誌は、アメリカ・ボストンに1897年に誕生したアーツ・アンド・クラフツ協会の創設者の一人でもあったスティックリーによって1901年10月に発刊され、1916年12月の183号まで毎月発行されていた。本稿ではこの資料を基に日本関連の言及が含まれるコンテンツを全刊を対象に抽出し、データベースを作成して分析をおこなった。



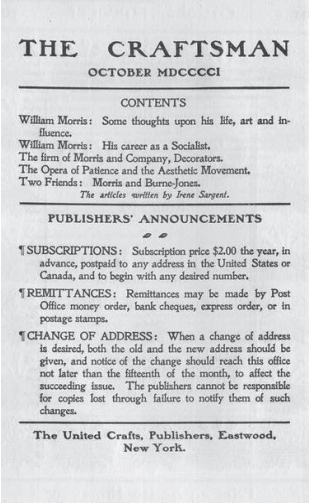


図４　『ザ・クラフツマン』創刊号表紙・目次 (1901)

各号の誌面は、自社製品の広告が巻末に配置されながらも、そのほとんどは住まいやくらしの事象に関するもの、あるいは美術、工芸や社会、労働等に言及するもの等、多種多様なコンテンツで構成されている。特に１号はウィリアム・モリス（1834-1896)（以下、モリス）特集（図4）、２号はジョン・ラスキン（1819-1900）（以下、ラスキン）特集で、その後数年の間は‘simplicity’や‘simple life’等の言葉が頻出し、モリスが提唱した生活における倫理的な側面を説くものが多く、スティックリーが1900年に入ってそれまでの製品から現代においていたクラフツマン・スタイルと呼ばれる一連のデザイン群に大きく転換した背景にこのアーツ・アンド・クラフツ運動の思想への強い傾倒があったことが明らかである。また同じくギルドを取り扱ったコンテンツが多く見られたことも、製造者としてのモデルをアーツ・アンド・クラフツ運動においていたことが確認できる。また各コンテンツは研究者や批評家を中心にさまざまな論者から寄稿されており、編集者スティックリー自身の論説も見られる。

『ザ・クラフツマン』誌とアーツ・アンド・クラフツ運動の思想との関連について筆者のこれまでの調査[5)]では、1904年を越える頃より徐々にコンテンツ数自体が増加していく中にあってアーツ・アンド・クラフツ運動関連のコンテンツ数は増加せず、その割合が低くなっていき、1910年頃には全体のコンテンツ数が創刊当時の約４倍になるが、その反面アーツ・アンド・クラフツ関連への言及を含むコンテンツが毎号０篇から３篇と極端に少なくなることが明らかとなった。またその少なくなった時期のコンテンツの内容も、アーツ・アンド・クラフツ運動やモリス、ラスキンらに直接言及するものではなく、展示会の紹介等間接的な取り扱いへと変化していた。

アーツ・アンド・クラフツ運動の思想を基底としたライフスタイルの実現を目指した様々な事象を掲載する目的は、アメリカで当時まだ主流であった伝統的な生活様式に対し、世紀の転換期に自らの製品のみならず、この時代に望まれる新しいくらし‘life’を示すことであったと考えられる。しかし号を重ねるに従ってバンガローやファーム・ハウス等、スティックリーの会社が取り扱っていた木造様式の住宅建築に始まり、インテリア、アウトドアスペース、庭づくり、キッチン、子ども部屋、ファイヤープレイス等から、さらに屋根、壁装、窓、郵便受け、レンガやスタッコ等のディテール、そして蝋燭立てやかご類、陶器等、そのコンテンツの扱う事物は細分化・断片化されていく。さらにそれらが再び元のアーツ・アンド・クラフツ運動の思想に統合される内容は、1916年の廃刊まで見当たらなかった。これはアメリカにおけるアーツ・アンド・クラフツ運動の終焉の様相と見ることができよう。

４.『ザ・クラフツマン』誌における日本

４.１全体の傾向

原著から、‘Japan’、‘Japanese’を鍵語として日本に関連する事象が出現するコンテンツ全ての抽出を全号から試みた結果、該当するものとして209 篇が確認できた。また 209 篇のうち 7 篇は、当時盛んであった国際博覧会での日本の出展を紹介する内容で工芸品と建築が取り上げられていたり、日本の衝立に関する内容で住宅の室内意匠とくらし方の両方に等しく言及されている等となっていたため、それぞれ前者を「工芸」と「建築」、後者を「建築」と「社会・文化」に重複して分類したため全 216 篇となった。そのうちコンテンツ全体が日本の事象がテーマとなっているものは 52 篇あり、また日本だけではないが、コンテンツのテーマに沿って日本への言及が一定量なされているものは 37 篇であった。次に抽出した全篇の内容を確認し取り上げられたテーマに沿って、「美術」、「工芸」、「デザイン」、「家具」、「建築」、「造園、「社会・文化」、「その他」に分類した（図 5）。さらに「工芸」、「建築」、「造園」、「社会・文化」は分析を明確にする目的から、表 1 に示す通りさらに項目を分けた。

表１　掲載項目の分類と比率

項目		コンテンツ数		比率
美術		37		17%
工芸	全般	10	44	20%
	陶磁器	13		
	漆	5		
	その他	16		
デザイン		4		2%
家具		2		2%
建築	住宅	6	27	12%
	住宅以外	21		
造園	全般	16	40	19%
	植物	24		
社会・文化	全般	27	58	27%
	文化	14		
	くらし	11		
	農業	6		
その他		4		2%
計		216		

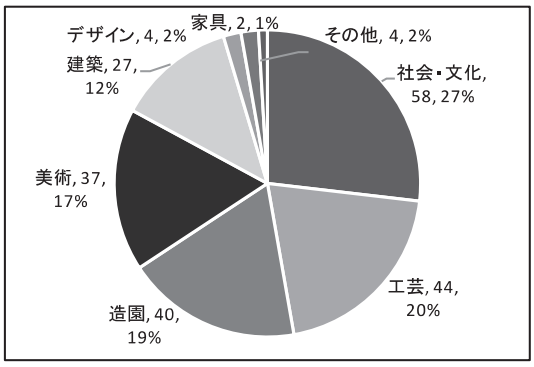


図５　掲載項目の割合

まず全体を概観すると、年代による取上げの回数に偏りは見られなかった。また内容の取り上げられ方も終始一貫して批判的なものは見られず、どちらかと言えば賞賛に近いものとなっている。ただしその点だけで言えば、それは日本に限ったことでは無く、アメリカにおけるアーツ・アンド・クラフツ運動の姿勢がその思想に沿った諸外国の事象の掘り起こしに積極的であったことによるものであると考えられる。

筆者が分類したテーマ別の全体の変遷を分析したところ、創刊した 1901 年から 1910 年あたりまでは、「美術」、「工芸」に関するものが多く見られ、その後徐々に「建築」、「造園」に関するものや「社会・文化」に関するものの割合が増加していることがわかった。この変遷のタイミングは３章で述べたアーツ・アンド・クラフツ運動思想への言及の減少の年代に符合する。また『ザ・クラフツマン』誌の発行人であるスティックリーは、家具類製造会社とは別に経営に乗り出していた住宅建築会社を 1909 年に社名を変え拡大している。「建築」や「造園」に関するコンテンツの増加はその影響が大きいと推測されるが、同時に「社会・文化」に関するものの割合が増加していることは、本源的なアーツ・アンド・クラフツ運動の思想への傾倒が徐々に失われていく中で、日本への視線もまた変化していったと見ることができるであろう。次に各テーマ別に考察をおこなう。

４.２「美術」に関するコンテンツの分析

データベースによると「美術」に関するコンテンツは全 209 篇中 37 篇であった。その中でコンテンツ全体が日本の事象をテーマとしているものは 11 篇であった。

まずここでの「美術」についてであるが、これはもう一つの分類項目である「工芸」を応用芸術とした時に区別される「純粋芸術」或いは「ファイン・アート」を意味するものとして項目を設けた。「純粋芸術」は広義には文学や音楽等様々な分野が含まれる言葉であるが、ここではアーツ・アンド・クラフツ運動の関連からテーマ性を明確にする目的もあり、版画を含む絵画、彫刻及び写真等の視覚芸術に関する内容が多かったため「美術」とした。

ここに分類したコンテンツの中では日本の絵画についてのものが多くの割合を占めていた。その対象は浮世絵、日本画であり、歌川広重、渡辺省亭ら１人の画家の作品について詳しく言及するコンテンツも見られた。特にこれらが創刊から初期に多く見られることが大きな特徴であり、その理由として 19 世紀後半のヨーロッパの中でも特にフランス美術に代表されるジャポニズムの影響が残る年代的な背景があったと考えられる。さらに興味深いのは「美術」に関するコンテンツの寄稿者に、ヨネ・ノグチ（野口米次郎、1875-1947）やマリー・フェノロサ（1865-1954）らの日本人や日本での滞在歴があるアメリカ人が見られることである。アメリカのジャポニズムはヨーロッパ経由の美術以外にも、日本でもよく知られるアーネスト・フェノロサ（1853-1908）（以下、フェノロサ）、エドワード・S.・モース（1838-1925）（以下、モース）、ラフカディオ・ハーン（1850-1904）（以下、ハーン）やライト等、アメリカ人独自の観察眼によって広がった。そのような独自の視点が『ザ・クラフツマン』誌上において日本の美術に対して向けられていることは、アーツ・アンド・クラフツ運動の思想を信条としながらもアメリカ独自の日本への視線が創刊初期に現出していたものとして考えられる。

４.３「工芸」に関するコンテンツの分析

「工芸」の項目は、包括する範囲の広い「社会・文化」を除けば一番多い 44 篇であった。そのうちコンテンツ全体が日本の事象を取り上げているものは 11 篇であった。工芸の活動はアーツ・アンド・クラフツ運動の根幹を成すものであることから、先述の通り小項目に分類をおこない詳しく分析をおこなった。

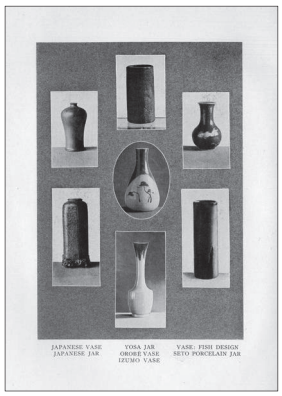


図６「工芸」に関する頁

［全般］の項目に分類したものは、当時の博覧会や展覧会の紹介記事に加え、工芸を応用芸術と捉えその取り組みに対する思想、生産のための労働のあり方やそれらがもたらす文化について述べられたものである。アーツ・アンド・クラフツ運動はモダン・デザインの先駆であり、そこにはそれらを創り出す労働のあり方であるギルドに対する思想が含まれるが、日本に対してもその点での言及をテーマにしたコンテンツで日常の労働とその仕事から生み出される美について言及されており、工芸を通して日本の労働への視線が注がれていたことが読み取れる。［その他］に分類したコンテンツでは、錫工芸、人形、手ぬぐい、彫金、木彫、提灯、楽器、染色・染料等に対する記事がそれぞれ１～４篇ずつ見られた。完成品への審美的な視線だけでなく、材料や手法に対する現実的な目が向けられていたことがわかった。

「工芸」の中でも最も多く具体的な事物として取り上げられていたのは、陶磁器に関するもので 13 篇であった。日本独自の陶磁器に関する論考に加え、中国や韓国のものとの比較や産出国の

一つとしての扱いも散見された。特にこの項目のコンテンツの出現は創刊から 1905 年までの早初期に多く、日本の陶磁器全体に対する論説の他に酒器や花瓶の紹介が多くの写真とともに取り上げられていた（図 6)。このような日本の陶磁器に対してのイメージにはヨーロッパと同じく日本の小美術品をコレクションとして愛好するジャポニズムの影響が見られるものと考え得る。またアーツ・アンド・クラフツ運動と関連の深いアール・ヌーヴォーとの関連に言及するコンテンツも初期に 3 篇見られることから、『ザ・クラフツマン』誌が主に対象とした読者層であるアメリカのミドル・クラスに、単なる異国趣味というだけではなく、それらに影響を及ぼしたとされる日本の文化的背景が伝えられていたことがわかる。

４.４「デザイン」・「家具」に関するコンテンツの分析

「デザイン」の項目には 4 篇を分類したが、それらは全て壁装やテキスタイルのプリント・パターンに関するもので（図 7)、美術との関連が大きい。20 世紀初頭はイギリスやヨーロッパでモダン・デザインを基底としたデザインそのものの概念や専門の職業が確立され始めた時代であり、日本には未だ「デザイン」として捉え得るべき事象が見当たらなかったかと思われる。

また、スティックリーはデザイン史上においては家具製造の人物として扱われることから、「家具」に関連する項目の抽出を試みたが、日本に関連する家具のコンテンツは 2 篇のみであった。それらはアメリカで作られる家具についてのコンテンツの中に僅かに日本の材料や単純性に対して言及されるのみで、日本の家具そのものを対象とする言及は見当たらなかった。

図 7「デザイン」に関する頁

４.５「建築」に関するコンテンツの分析

「建築」に関連する項目は 27 篇であった。そのうちコンテンツ全体が日本の建築を取り上げているものは 8 篇であった。出現する年代は、前出の「美術」、「工芸」とは対照的に 1908 年以降から徐々に増え始め後半に多くなっている。［住宅］と［住宅以外］の項目に細分化したが、取り上げられた内容は［住宅以外］が 21 篇と多かった。

［住宅以外］のコンテンツの内容を見ると、日本の大工職人、内装材や瓦、木造建築の材料や仕上げ等の紹介といったものも多かったがいずれも単発的であり、それに比して繰り返し取り上げられていたのがアメリカの住宅建築と日本建築との関連に関するコンテンツであった。特にアーツ・アンド・クラフツ運動に関連の深いグリーン兄弟によるパサデナのギャンブル邸や、日本建築に影響を受けたとされる庇の深いアメリカ西海岸の住宅建築についてのコンテンツである。アーツ・アンド・クラフツ運動が受容された時期のアメリカの建築家に少なからぬ影響を与えたとされる 1893 年のシカゴ博覧会から、徐々にその影響がアメリカで実際の住宅建築に現出し認知された時期が 1900 年代初頭であり、それらはいち早くこのような月刊誌によって日本建築との関連と共に紹介されていたことがわかる。また、建築は美術品や工芸品のように現物そのものを収集し趣味としてコレクションできるものではない。代わりに日本建築の様態・様式の再解釈とともに元の姿を変えてアメリカの住宅建築として現れたのである。日本の建築への主な興味は、シカゴ博覧会の鳳凰殿を始め歴史的な木造の寺社建築にあったことが、ここでのコンテンツの内容や割合からも明らかとなった。

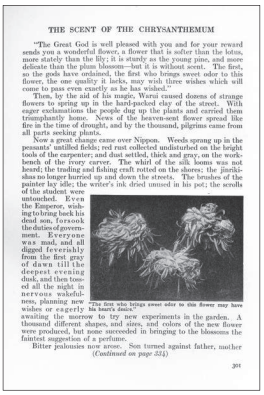
［住宅］に分類したコンテンツの内容からは、日本の住宅建築はまた別の受け止められ方をしていることがわかった。それはアーツ・アンド・クラフツ運動の思想である‘simplicity’としてのくらしの場所というものである。中でも 9 カットの写真とともに 10 頁に及ぶコンテンツ“Japan's beauty an inspiration to American home-builders”で紹介されているのは、鳳凰殿のような優雅さとは対照的な質素とも言えるような生活風景ではあるが（図 8）、その成り立ちに美を見出すというここでの言説はアーツ・アンド・クラフツ運動の主義そのものであり、もう一つの日本の建築に対する視線を見出すことができる。

図 8 ［住宅］に関する頁

4.6「造園」に関するコンテンツの分析

「造園」の項目は、「社会・文化」、「工芸」についで 3 番目に多い 40 篇であった。そのうちコンテンツ全体が日本の造園に関連するものを取り上げているのは 12 篇で「工芸」のそれより多かった。出現の年代は「建築」と同様、後半になるほど多くなっている。

日本庭園のヨーロッパへの伝搬は 1862 年の第二回パリ万国博覧会での池泉式庭園の出品や 1873 年のウィーン万国博覧会が契機であるとの考え以外に、17 世紀末に執筆され 18 世紀には英語やフランス語等にも翻訳され広まったエンゲルベルト・ケンペル（1651-1716）の『日本誌』によって早くから伝わっていたとされる [6]。その後、モースによる著書 *Japanese Homes and Their Surroundings* や、ジョサイア・コンドル（1852-1920）による著書 *Landscape Gardening in Japan* によって日本庭園は当時のアメリカにもよく知られていた。



THE SCENT OF THE CHRYSANTHEMUM

"The Great God is well pleased with you and for your reward sends you a wonderful flower, a flower that is softer than the lotus, more stately than the lily; it is sturdy as the young pine, and more delicate than the plum blossoms—but it is without scent. The first, so the gods have ordained, the first who brings sweet odor to this flower, the one quality it lacks, may wish three wishes which will come to pass even exactly as he has wished."

Then, by the aid of his magic, Wawi caused dozens of strange flowers to spring up in the hard-packed clay of the street. With eager exclamations the people dug up the plants and carried them triumphantly home. News of the heaven-sent flower spread like fire in the time of drought, and by the thousand, pilgrims came from all parts seeking plants.

Now a great change came over Nippon. Weeds sprang up in the peasants' untilled fields; red rust collected undisturbed on the bright tools of the carpenter; and dust settled, thick and gray, on the workbench of the ivory carver. The whirl of the silk looms was not heard; the trading and fishing craft rotted on the shores; the jinrikisha no longer hurried up and down the streets. The brushes of the painter lay idle; the writer's ink dried unused in his pot; the scrolls of the student were untouched. Even the Emperor, wishing to bring back his dead son, forsook the duties of government. Everyone was mad, and all digged feverishly from the first gray of dawn till the deepest evening dusk, and then tossed all the night in nervous wakefulness, planning new wishes or eagerly awaiting the morrow to try new experiments in the garden. A thousand different shapes, and sizes, and colors of the new flower were produced, but none succeeded in bringing to the blossoms the faintest suggestion of a perfume.

"The first who brings sweet odor to this flower may have his heart's desire."

Bitter jealousies now arose... Son turned against father, mother

(Continued on page 334)

図 9 ［植物］に関する頁

『ザ・クラフツマン』誌での取り上げられ方を見ると、その内容は日本庭園風に造られたアメリカの庭園の紹介の他、歴史的な日本庭園のランドスケープ、それらを形成する池やそこに架かる橋、生垣等のエレメントに関する言及が 40 篇中 16 篇となっていた。スティックリーは先述の通り住宅建築会社を経営していた関係から、この『ザ・クラフツマン』誌に広告として掲載した自社の住宅案を集約して『クラフツマン・ホームズ』、『モア・クラフツマン・ホームズ』という書籍を発行している。それらを見ると、彼の住宅建築会社の住宅は主に郊外型のバンガロー・スタイルやファーム・ハウス型の木造住宅であり、付随する庭の造園計画はアメリカの郊外での理想的なくらしを表現する上で重要なファクターであったと考えられる [7] [8]。『ザ・クラフツマン』誌には、日本に関連するもの以外にも造園のコンテンツが多く、日本の庭園は造園のプランの一つとして紹介されている。そのため個人の庭づくりに現実的に取り入れられるような部分的なエレメントに言及するコンテンツも多いものと考えられる。

さらに、この「造園」に関連するコンテンツの内容の大きな特徴として挙げられるのは全 40 篇の半数以上となる 24 篇が日本の植物についての言及となっていることである。それらは松、桜、桃、イチョウ、ツツジ等の樹木に加え、後半の年代になるに従って菊、葛、紫陽花、バラ、百合といった草花に至り対象が細分化されていく（図 9）。ここではさらに日本庭園の歴史的背景から離れ、「入手可能な日本」への視線が次第に強くなっており、アメリカの消費文化の一端としての断片化の様相を見ることができる。

４.７「社会・文化」に関するコンテンツの分析

『ザ・クラフツマン』誌は、アーツ・アンド・クラフツ運動の思想を基底として始まった月刊誌であることから、それに関連の深い事物を中心に分類をおこなったが、残ったコンテンツの内容は具体的事物ではない事象であったため、「社会・文化」として分類した。項目別に見ると一番多い 58 篇となったが、その他の項目との数量的な比較は、内容の違いから意味はないと考える。また年代との関連は、［全般］は極端な偏りは見られなかったが、［文化］、［くらし］、［農業］は後半に多く見られた。アーツ・アンド・クラフツ運動は社会的思想のもとのデザイン活動であることから「社会・文化」で取り上げられた内容についても社会的背景として重要と見做し分析を行った。

まず［全般］として 27 篇を分類した。内容は、日本の政治家、社会保障制度、民主主義、教育等多岐に渡るが、中でも 1904 年に始まった日露戦争についてのコンテンツが複数篇含まれていることは、この時代の日本への一般的な視線を語っている。次に 14 篇を［文化］として分類したが、その内容は主に日本の生花についてであった。しかし本格的な華道としての紹介ではなく視覚的な視点のものであった。また 1900 年初頭であれば、岡倉天心（1863-1913）による茶道の紹介著書 *The Book of Tea* もアメリカで刊行されていたことになるが、関連コンテンツは見あたらなかった。

［くらし］として 11 篇を分類した。その内容は先述の日本での滞在歴があるハーンやフェノロサの日本での生活に言及するコンテンツの他に、4.5 で述べたように‘simplicity’の例として取り上げられているものが 4 篇と割合として多かった。生活様式の違う日本の一般的なくらしからは前述の草花のように取り入れられる具体的な事物は無かったであろうが、アーツ・アンド・クラフツ運動に通ずる思想のイメージとして、当時の日本の質素なくらし方は興味深いものであったと推察できる（図 10）。さらに［農業］に関するコンテンツも 6 篇と一定量見られた。野菜や鳥を使った農法等具体的事象についてのコンテンツにおいて日本が出現しているが、4 篇は農業における労働のあり方に関するものであり、ここにもギルドを信条とするアーツ・アンド・クラフツ運動を通した視線が注がれていたと見ることができるであろう。

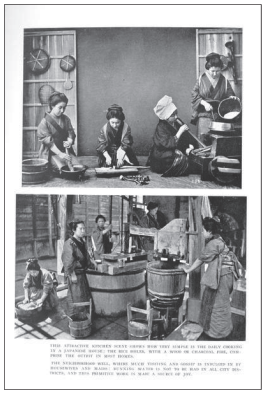


図 10［くらし］に関する頁

５．おわりに

20 世紀初頭のアメリカにおけるアーツ・アンド・クラフツ運動の受容のあり方については、ライトやグリーン兄弟をはじめとする建築家の作品や、スティックリーのクラフツマン・スタイルの一連の家具類のデザインそのものに注目が集まり言及されてきた。しかし、それらのデザインを生み出したアメリカ独自のアーツ・アンド・クラフツ運動の思想や方向性、そしてその変遷を探るうえで、この運動を様々な事象と結びつけて一般の認知とする影響力を持っていた『ザ・クラフツマン』誌全体の様相が資料として活用されることはなかった。

今回、『ザ・クラフツマン』誌に掲載された「日本」の全事象をたどることによって、当時のアメリカのアーツ・アンド・クラフツ運動の活動の中での日本観が、どのような事象に集まり、その内容はどうであったか、またどのように変容していったのかをデータで裏付けながら具体的に示すことができた。

『ザ・クラフツマン』誌は先にも述べたように、創刊当初はモリスやラスキンらのアーツ・アン

ド・クラフツ運動の生活における倫理的側面の思想が重要視された内容となっていたが、年代が進むにつれそれらが言及されることは徐々に減少し、相反して増加していくコンテンツの内容は、再び元の思想に統合不可能なほど断片化された事象への直接的なものとなっていた。それと同様に日本に対する視線の方向も、19 世紀のヨーロッパにおこったジャポニズムの影響が残る美術や工芸に関するものから、徐々に建築や造園へと独自の興味の対象に変化している。そしてそれらは当時のアメリカの住宅建築やその造園に直接取り入れられるような現実的なものであり、さらにここにも事物の断片化と、その要因となったと考えられるアメリカ特有のコマーシャリズムの様相が現出していると見ることができるであろう。

しかしその一方で、『ザ・クラフツマン』誌が終刊となる 1916 年という 20 世紀早初期までは日本への視線にはまだアーツ・アンド・クラフツ運動が標榜する‘simplicity’のイメージが残っていたこともわかった。ここからアメリカの日本への視線は二度の大戦を経て大きく変化していくわけであるが、20 世紀初頭のアメリカのアーツ・アンド・クラフツ運動の流れの中で、変容しながらも多くの日本への視線を育んだ点において『ザ・クラフツマン』誌の果たした役割は大きかったといえる。

参考文献

1) Gustav Stickley：*The Craftsman*、Issue No.1-183、1901-1916

2) 横手義洋：米国アーツ・アンド・クラフツ運動下におけるラルフ・アダムス・クラムの日本建築観とその受容に関する研究、日本建築学会計画系論文集第 78 巻第 687 号、pp.1197-1205、2013-05、

3) Kevin W. Tucker：*Gustav Stickley and the American Arts & Crafts Movement*、Yale University Press、pp.19-49、2010

4) 矢部仁見：グスタフ・スティックリーの家具に関する考察、日本インテリア学会第 32 会大会研究発表梗概集、pp.5-6、2020

5) 矢部仁見：グスタフ・スティックリーの『ザ・クラフツマン』にみるアーツ・アンド・クラフツ運動の受容に関する考察、日本インテリア学会第 33 会大会研究発表梗概集、pp.75-76、2021

6) 廣長 皓介、西田 雅嗣：19 世紀末から 20 世紀初頭のフランスにおける日本庭園とエドゥアール・アンドレ、日本建築学会近畿支部研究報告集, 計画系 54 号、pp.677-680、2014-05、

7) Gustav Stickley : *Craftsman Homes*、*Dover*、pp.102-124、1979（初版　Craftsman Publishing Company、1909）

8) Gustav Stickley : *More Craftsman Homes*、*Dover*、pp.160-187、1982（初版　Craftsman Publishing Company、1912）

図版出展

図 1：Kevin W. Tucker：*Gustav Stickley and the American Arts & Crafts Movement*、Yale University Press、p.114、2010

図 2：Kevin W. Tucker：*Gustav Stickley and the American Arts & Crafts Movement*、Yale University Press、p.199、2010

図 3：Gustav Stickley：*Craftsman Homes*、*Dover*、（ページ表記無）、1979
（初版　Craftsman Publishing Company、1909）

図 4：Gustav Stickley：*The Craftsman*、Issue No.1、（ページ表記無）、1901

図 6：Gustav Stickley：*The Craftsman*、Issue No.44、p.216、1905

図 7：Gustav Stickley：*The Craftsman*、Issue No.168、p.575、1915

図 8：Gustav Stickley：*The Craftsman*、Issue No.139、p.50、1913

図 9：Gustav Stickley：*The Craftsman*、Issue No.171、p.301、1915

図 10：Gustav Stickley：*The Craftsman*、Issue No.139、p.49、1913